開善寺智藏法師の佛性義

太田久紀

(一)

ここで述べようと思うのは、開善寺智藏法師（四五八―五二二）の佛性義である。

しかし周知の如く、南北朝の資料は散佚したものが多く、智藏法師の撰述も全く殘っていない。そこで、今回は『四論玄義』に「智藏法師云……」等と言われているものを中心にして、その佛性義を整理したいと思う。そしてそれに關連する範圍において、『大乘玄論』にも觸れ、嘉祥大師の佛性說をも參考にしたいと思う。

智藏法師の佛性義には、一般的な意味においての佛性義と、特徵のあるものとしての五種佛性義、共有四名・各有四名の佛性義とが主なものとして擧げられると思う。そしてそれらの中に、智藏法師の宗旨を窺わせるもの、又、佛性說展開の上に、留意しておいてよい幾つかのもの等があると言ってよいであろう。

(二)

まず、佛性義とは何か。

衆生に如來性、佛陀性のあることを說く系統の思想を、佛性說或は如來藏說と言う。佛性義は佛性說のことである。

有漏としての衆生の、現實に展開するその妄なる方面を追求するのが唯識說であるとするならば、衆生に因として如來性があり、それが果として顯現して佛陀となるという眞なる方向からのものがこの思想である。佛教の最も基本的な思想の系譜と言ってよいであろう。たとえば徹底的に有漏性の衆生を追求する護法系の唯識教學においても、無漏種子、本有種子等の教說として、轉依つまり佛陀性への轉開の思索という形で根底に如來藏思想が說かれている。

如來藏說も、佛性說も、衆生に如來性、佛陀性があるという點では共通であるが、次のようにその說相の差異を敢えて擧げることができるであろう。卽ち、如來藏說は、如來性をその隱・顯の關係で捉える

もの、佛性說は、佛陀性をその因・果の方向から考察するものということである。

如來藏說は、『華嚴經』に始源を持ち『如來藏經』以來の諸經、『寶性論』『佛性論』等の諸論、『無上依經』『起信論』等の經論に說かれるものであり、佛性說は『涅槃經』の系統に說かれるものということができよう。今しばらくここでは、佛性說についてのみ考えたいと思う。

中國において、佛性の問題が論究されるようになったのは、法顯が佛馱跋陀羅と共に、『大般泥洹經』六卷を飜譯したことに始り、なお曇無讖の『涅槃經』四〇卷傳譯の事業や、道生等の研究の刺激をうけて『涅槃經』の研究が盛んに行われたのと並行してであった。『涅槃經』は、卽佛性說とみてもさしつかえない經典であるので、『涅槃經』の研究は、卽、佛性の研究ともいうことができる。南北朝の佛教界のみをみても、『大般涅槃經集解』『大乘義章』『四論玄義』『大乘玄論』、天台大師所說の諸撰述等、何れの撰述に於ても、殆んど說かれざるものはないといっても過言ではない。五世紀から、二〇〇年位の間に、佛教界では、主要ないろいろの問題が提出されたようであるが、その中でも、最も根本的な問題の一つとして、佛性說が攻究されたのである。

蓋し、佛性の問題は、我々の宗教生活を成立せしめるかどうか、それを可能ならしめるかどうかの最も基本的條件にかかわる問題だからである。後、長く續く、一性皆成か五姓各別か、闡提成か不成かの論義等をみても、容易に理解されるところである。

『涅槃經』に說かれる正緣の二因、生了の兩因、或は、因、因因、果、果果の四種佛性等々の佛性の諸說をとりあげ、多くの學匠達はこれを攻究し、種々の解釋を展開した。各學匠達は、その各々の宗とする立場から、佛性義を釋し、佛性義の中心となる正因佛性については、その宗旨を內容とする立場からそれを說いた。『涅槃經集解』『大乘義章』等にみられる正因佛性義、天台大師撰述諸書に表われる正因佛性義、或は、『大乘玄論』『四論玄義』に說かれる三論家の正因佛性義、又その中に、異解異釋として擧げられているそれ以前の正因佛性義等にそれを窺うことができる。

(三)

さて、ここで述べようとするのは、開善寺智藏法師の佛性義であるが、まず、順序上、『四論玄義』『大乘玄論』に異解として擧げられている諸家の佛性義とその破斥について觸れておきたい。その破斥の對象として擧げられる諸家の中に、智藏法師の佛性說と言われるものがみられるからである。なお、當時の佛性思想については鎌田茂雄博士が「道性思想の形成過程」(『東洋文化研究所紀要』第四十二册)に、諸家異釋については、坂本幸男博士が「六朝における佛性觀」(『文化』二一卷六號)に詳しく述べられているので、ここでは、必要な點のみに觸れることとする。

諸家の異釋については、『大乘玄論』では、

古來相傳釋佛性不同、大有諸師、今正出十一家、以爲異釋、就十一師皆有名宗、今不復據列、直出其義耳(1)

と述べて、十一家の佛性義を列擧し、後、その十一家を三類にまとめ

て、これを破斥している。これに對して、『四論玄義』では、

於三師宗本中末執不同、略有十家、(2)

と述べ、十家の異解を擧げて、逐次これを批判している。

そこで、兩撰述の十家・十一家の正因佛性義を整理すると次のようになる。

	『四論玄義』	『大乘玄論』
1	白馬愛法師 當果	一 衆生 僧旻、道朗？慧琰？
2	靈根令正 一切衆生本有得佛之理	二 六法 智藏、僧柔
3	靈味小亮法師 眞俗共成衆生眞如性理	三 心 智藏、僧柔
4	梁武蕭 眞神	四 冥傳不朽 小安、慧琰？
5	中寺小安法師 冥傳不朽	五 避苦求樂 光宅雲法師
6	光宅雲法師 避苦求樂性義	六 眞神 靈味高高、靈味寶亮？
7	莊嚴旻法師 衆生	七 阿梨耶識自性清淨心 攝論、地論？
8	開善智藏法師 假實・心識	八 當果 道生？
9	地論師 第八無沒識	九 得佛之理 靈根僧正
10	攝論師 第九無垢識	十 眞諦 和法師、靈味寶亮
		十一 第一義空 摩訶衍師

共に、これは列擧されている順序の通りである。『四論玄義』は人名を一一擧げているので、それを擧げ、『大乘玄論』は、全部の名は擧げていないので、正因佛性の內容を擧げて、人名については、前述の坂本博士の論文で推定されているものを入れたものである。

そこで、この兩撰述の諸家の列擧の仕方を比較すると、その基準になるものが根本的に違うようである。卽ち、『四論玄義』は、不明のものがあるとしても、大體、歷史的順序に從っているらしく思われるのに對して、『大乘玄論』は、思想の內容の整理という立場、つまり、三論宗の宗旨の立場からこれらを並べかえていると言えるように思われる。それは、諸家への批判破斥にしても、『四論玄義』は、1、2と9、10の諸家をまとめる以外は、すべてその順序通りに個々に破斥しているのにも窺えるように思う。そして、歷史的順序に從っているということからの必然の傾向として、諸家相互の思想的內的關連性の思索はみられないと言ってよい。

それに對して、『大乘玄論』は、續いて、

然十一家、大明不出三意、(3)

と述べて、十一家を思想の內容から、三の類型にまとめるのである。卽ち次のように整理している。

1第一家以衆生爲正因、第二以六法爲正因、此之兩釋、不出假實二義、明衆生卽是假人、六法卽是五陰及假人也、

2以心爲正因、及冥傳不朽避苦求樂及以眞神阿梨耶識、此之五解、雖復體用眞僞不同、並以心識爲正因也、

3有當果與得佛理及以眞諦第一義空、此四之家、並以理爲正因也、(4)

即ち、一、二家を衆生・假人というような人を佛性とするものとしてまとめ、三、四、五、六、七の五家を、心識を正因となすものとし、八、九、十、十一の四家を、理を以て正因佛性とする類型のものとして整理しているのである。これは、それ以前の諸家の正因佛性義を紹介するというだけのものではなく、思想のほり下げによって、それら相互の内的な共通性を捉え、それに對して、三論宗の宗旨の根本から批判を加えるというものであって、諸家の思想の紹介によりも、それを破斥する當の三論家の宗旨の宣揚ということの方が意識されているように思えるのである。『四論玄義』は發生的である、『大乘玄論』は體系的であると言えよう。

『四論玄義』と『大乘玄論』の異釋諸家の取り扱いの差異については、大體このように言えるであろう。そこで、次に『大乘玄論』の異解破斥をみれば、三論家の佛性義がおのずから推察され、又その中に、智藏法師の說があるので、それとの對比の手がかりとなると思われるのでそれについて當ってみよう。

さて、第一類の思想への批判は、第一師に對して三、第二家に對して一の理由を擧げて行われている。そしてこの中に、智藏法師の一つの思想がみられるのである。即ち、第一師に對する批判は次の通りである。

○經云、若菩薩有我相人相衆生相則非菩薩、又言、如來說衆生卽非衆生、正因本爲菩薩、經旣說言有衆生相則非菩薩、寧得以衆生爲正因耶、故知、有衆生者皆是妄想、何可以妄想顚倒得爲正因耶、

○若以衆生爲正因者、只問、昔日初教已明有衆生不、若初教已明有衆生者、便應初教已明正因佛性、彼釋言、初教已明衆生、但未說爲正因耳、若爾後教說衆生爲正因者、還指初教衆生以爲正因不、若爾初教衆生理中已明佛性、若不可言初教已辨佛性者、云何以衆生爲正因耶、

○汝引經言、一切衆生悉有佛性、故知、衆生是正因佛性者不然、旣言衆生有佛性、那得言衆生是佛性耶、若言衆生是佛性者、可得言一切衆生悉有衆生、一切佛性悉有佛性不、若不得者、故知、衆生與佛性有異、不得言衆生是佛性也、(5)

續いて第二家に對しては、

○經云、佛性者不卽六法不離六法者、言此是何語而橫引之此文乃明佛性、非是卽六法、復非是離六法、何時明六法是佛性耶、若言不離六法故六法是佛性者、復言不卽六法故六法非是佛性、此語若爲得通、明知、以不解讀經故、所以致謬耳、(6)

と言われている。

この第一類の佛性＝人とする智藏法師の含まれている二家に對する批判の中で、最も根本的なものは、「有衆生者皆是妄想、何可以妄想顚倒得爲正因耶」という批判であろう。卽ち、衆生は妄想顚倒であって、眞なる佛性ではないという批判である。非眞非俗の中道を正因となすという三論家の佛性義から、俗である人をとりあげて、眞となすという固定的把握への批判が根本となるとしても、なおここで文章の上にはっきりみられる批判は衆生は妄である、妄は眞ではないという立場での批判と言ってよいのではあるまいか。換言すれば、日常的生存としての生と、宗教的生とは根本的に違うということである。衆生と菩薩とは直線的に繋がるのではなく、その間には、質的な次元の轉換が要求されていると考えられるように思うのである。このことは、

後に述べるような、智藏法師と嘉祥大師との佛性義の違いを示唆するものがあるように思う。

次の第二類の諸家に對する批判にもこれと同じ立場がみられるように思う。そしてここにも智藏法師の佛性說が含まれているのである。即ち左のように述べられている。

○以心爲正因佛性者不然、經云、有心必得菩提者、此明有心之者必得菩提、何時言心是正因佛性耶、于時畏有如此謬故、卽下經云、心是無常佛性常、故心非佛性也、經既分明、言心非佛性面强言是者、豈非與佛共諍耶、

○心既不成、心家諸用冥傳不朽避苦求樂等、悉皆同壞也、

○若據人證者、舊來誰作如此釋、此是光宅法師、一時推畫、作如此解、經無證句、非師所傳故不可用也、

○第八阿梨耶識、亦非佛性故、攝大乘論、云是無明母生死根本、故知、六識七識乃至八九、設使百千無量諸識皆非佛性、(7)

この批判破斥で、最も根本的なものは「心無常佛性常、故心非佛性也」と、識は「無明母生死根本」だから、佛性ではないとなすところであろう。そしてこの立場も、一類諸家に對するのと同じく、妄は眞ではない、という批判と考えてよいであろう。

この第二類諸家の說が第一類の思想と別にまとめられているのは、第一類の諸家が、衆生・人を全體的に佛性となすのに對して、これは、衆生の中の心、或は心識というより微細な內的なところをとり出して佛性としている點であろう。しかし、ここで批判の對象とされている性質は、無常なる心、生死の根本たる識を、常、淨となす誤謬であって、本質的には第一類諸家への批判破斥と同じものと言ってよいのである。

第三類諸家への批判は次のようである。

○以第一義空爲佛性者、下文卽言空者、不見空與不空名爲佛性、故知、以中道爲佛性、不以空爲佛性也、

○眞諦爲佛性者、此是和法師小亮法師所用、問眞諦爲佛性、何經所引、承習是誰、無有師資亦無證句、故不可用也、

○當果爲正因佛性、此是古舊諸師多用此義、此是始有義、若是始有、卽是作法、作法無常、非佛性也、

○得佛理爲佛性者、此是靈根僧正所用、此義最長、然闕無師資相傳、學問之體、要須依師承習是誰、(8)

ここで大切なのは、いうまでもなく、「以中道爲佛性、不以空爲佛性也」である。この破斥の一段においてはじめて、その基準である中道が說かれ、「非眞非俗中道爲正因佛性也」と言われる三論家の正因佛性義によって「以空爲佛性」が破せられるわけである。

『大乘玄論』は續いて「得佛之理」を義十一家に通ずとして、更に、第一有無破、第二三時破、第三卽離破によって、これを破し、有無・三時・卽離の二邊・二見に墮するものは佛性ではないとして述べている。

そこで、これらの批判破斥によって、きわめて大膽な言い方をすれば、三論家では、衆生・心・心識等、有漏と言い得るものは、正因佛性とは認めない。佛性とか眞諦等と言われるものも、空というような、消極的、固定的な把握ではなく、むしろ、能動的な中道といわれるような形で捉えられるということである。三論家では、非有非無非因非果等と否定的な形がよくとられるのであるが、ここの所からは、佛性はそのような靜的なものと考えられるのではなく、逆に、否定を

通して最も肯定的にほとばしり出る中道としての宗教的生命の躍動をおさえているもののように思われるのである。

以上のような形で、破斥の中から、三論家の佛性義も推察されるのであるが、しかし、その破斥される諸家の佛性義の傳統の上に三論家の佛性義が形成されることも見落してはなるまい。そして、ここで破せられるその中に、開善智藏法師の佛性義があり、しかも、法師の佛性義には、破せられるだけのものでないもの、むしろ、佛性說展開の上からは、きわめて重要と思われるものがあることを見逃すわけにはいかない。『四論玄義』の中に散見する智藏法師の佛性義を整理すると、破の對象としてあげられている佛性義が、正しく理解されていない點があるようであり、逆に、三論家佛性義の原型ともいうべきものがそこにあるのに氣づくのである。

(四)

さて、そこで開善智藏法師の佛性義を直接知ろうとするわけであるが、その撰述は、全部散佚しているため、その詳しい思想を知ることはできない。ただ、『四論玄義』の中に「開善智藏云……」等と說かれているのでそれを整理してある程度明らかにしたいと思う。

『四論玄義』にみられる法師の佛性義をみると、次のようなものが浮び出してくる。卽ち、(1)一般的意味での佛性義、(2)五種佛性義、(3)共有四名・各有四名の佛性義である。

(1)まず、一般的意味での佛性義については、次のように述べられている。

> 定林柔法師義、開善智藏師所用、
> 通而爲語假實皆是正因、
> 別則心識爲正因體、……法師云窮惡闡提亦有反本之理、……衆生心識相續不斷終成大聖、今形彼無識、故言衆生有佛性也、……有心識靈知、能感得三菩提果(9)、

ここでわかることは、1.智藏法師の思想は、定林の柔法師の佛性義を稟けていること、2.正因佛性が通別の二に開かれていることである。2.については正因佛性が通として「假實皆是正因」、別として「心識爲正因體」と說かれている。しかして、この心識は、感得三菩提果・終成大聖のものであるとされている。

そこで前の破斥をふりかえってみると、そこでは、ここで一つの體系を開いて通別の二としたものを別々のものとして取扱っており、更に心識は、妄としてのみの意味のものとして批判してあった。しかしこの智藏法師の文章から考えると、通別の二を別々に扱ってよいかどうか。又、心識を破する場合、それを無常なるもの、無明母なるものとする立場のみへの批判であってよいかどうか疑問であるように思う。ここで心識はそれとは逆に感得三菩提果・終成大聖のものとされているのである。

そこで、このように異解として破斥されて行く智藏法師の正因佛性說と、破斥して行く嘉祥大師の佛性說とを比べてみると、その間には、宗旨の相違があるように思われる。それは、嘉祥大師が、衆生・六法・心識等を破斥す場合の基準になつているのは、衆生と佛、妄と眞とは異るという立場であり、そこから、一類・二類の異解は破せ

られているということである。それは、日常的生と、宗教的生とは根本的に異るということと言えるように思われるのである。それに対して、智藏法師の佛性說の基本には他に了・緣等の佛性が說かれているにしても、三論家からみれば有漏、雜染と言われるような衆生・心識それ自體と宗教的生とが直線的に繫がれているような面があるように思われるのである。そしてこれは、後述の五種佛性義、各有四名の佛性義の正因佛性說にも全く共通した形でみられるところである。

(2)智藏法師は、この基本的な正因佛性說を基礎にして、續いて五種佛性說を說く。

五種佛性說は、『涅槃經』以來の四種佛性を開いたものとも言えるが、又、正緣の二因、生了の兩因や、因、因因、果、果果の四種佛性等を混合して構成された佛性義という方が適當であるかもしれない。

嘉祥大師に到ると、三論宗の完成された三因兩果の五種佛性說が說かれるのであるが、その形成過程において、智藏法師の五種佛性說は重要な意味を持つように思う。

智藏法師の五種佛性は次のように述べられている。

開善智藏法師云、
正是專當不偏義、衆生神明與如來種智、雖復大小之殊、而同是慮智、性相感召、故謂名正因、正感佛果、對緣因爲名、非傍助義、
緣因者緣由爲義、雖有正因、不脩萬行、終不能得果、由藉萬善脩行故得佛果、對正因爲緣、名亦名境界。……但爲觀智所緣、爲心作境故名境界也、
了因者、照了爲義、萬善之類、顯出佛果、故名了因、
果者以酬因爲義、
果果者、謂從果生果故名果果也。(10)

つまり、正・緣・了・果・果果の五種佛性說である。

まず正因佛性は、「衆生神明」「如來種智」と言われ、それが、「慮智」という共通性において「性相感召」「正感佛果」のものとして一のものと考えられている。これは、さきに、心識・假實として說かれていたものと同じ性質である。ここでも、衆生神明と如來種智とが、大小に殊があるとしても、一般的には妄とされる慮知という性質によって一つのものとおさえられ、それが正因佛性とされるのであって、妄と眞とがそのまま結びつけられる智藏法師の佛性義の基本的な立場がみられると言えよう。

緣因については、一般的意味の、助發としての內容と、境界因と說かれる內容のものとの二義あるものとして說かれている。一般的なものは、「雖有正因、不脩萬行、終不能得果、由藉萬善脩行故得佛果、」であって、正因佛性があっても、佛果が得られるわけではなく、萬行によってそれが可能であるとするその萬行のところを緣因ということばで表わしたものである。正因佛性が、衆生と如來の一の側面を表にしたものであるのに對して、これは異の面を捉えたものと言えよう。

そして、衆生—心識＝如來という正因佛性說の智藏法師が、この緣因佛性をそこにどのように、結びつけていくのかは重要な問題と思われるが、それについては說かれていないようである。衆生の中の如來性が、緣因によって顯現し、佛果に到るというのなら容易に理解されるのであるが、衆生卽如來という正因と緣因との關係は更に深い宗教的課題に繫がるものであろう。

境界因については、「但爲觀智所緣、爲心作境故名境界也」といわれ、緣因が同時に境界因とも言われる旨が說かれ、內容としては、觀智の所緣と說明されている。緣因が、助發を本質とする限り、觀智の所緣である境界因が、緣因の中に入れられるのは妥當である。しかし、後述の各有四名の佛性義の因の中では、緣因と別立されており、又、了因と共に緣因の中に說かれる所もあって、全體としては整理が不完全であったと言えるようにも思われる。しかし、少くも、緣因の中に境界因が說かれているということは、後の三論家の三因兩果の五種佛性義で、緣因を開いて了因、境界因とするその境界因が、ここにすでにみられるとも言えるであろう。

了因は、照了の義で、萬善の類、顯出佛果のものと解せられている。これは、了因のもともとの意味で、生了二因の了因と同じ性質のものである。從って、ここで說かれる了因は、三因兩果の佛性義の觀智としての了因とは、根本的に性質を異にするものである。しかして、了因についても、ここで說かれるものと、後の各有四名の因の中に說かれる了因とは、やはり內容が異っているのである。

果・果果については一般の通りである。

以上が、智藏法師の五種佛性義である。

ところで、『涅槃經集解』には五種佛性義はみられないようである。『集解』の編纂については問題があるとしても、『集解』に五種佛性說がなく、智藏法師に到って五種佛性義が說かれたことは記憶されてよいであろう。

(3)次に共有四名・各有四名の佛性義が說かれる。

まず、共有四名については次のように述べられている。

共有四名者一因、二因因、三果、四果果也(11)、……

直名因者謂十二因緣、因緣之體、唯觀智作因、無所有更因故單受因名也、

因因者謂觀智之心是了因體、以因前境、復爲三菩提因故受重因稱也、

果者以三菩提衆因所得前來有果、宜單受果名也、

果果者謂大涅槃、此是斷德、不由斷得智而由智故斷卽涅槃義、是果果果、故重名果果也(12)、

卽ち、因は十二因緣、因因は觀智、果は三菩提、果果は大涅槃であって、共有四名の佛性說は、『涅槃經』以來のいわゆる四種佛性そのままであって、特にとりあげるべきものはない。

各有四名については、

各有四名者因四者、一正因、二緣因、三了因、四境界因也、

果四者、一三菩提、二涅槃、三第一義空、四智慧(13)、

と述べられており、因、果、それぞれ有四名の意味であることがわかる。四因は、正、緣、了、境界であり、四果は、三菩提、涅槃、第一義空、智慧の四である。

四因については次のように說かれている。

○正因者謂心是覺知、非招大覺、氣類無差至當無偏故名爲正因也(14)、

○緣因者善及衆義助發正因、傍相緣由故曰緣因(15)、

萬善但是相緣由而已(16)、

必藉萬善方現故須立善爲了因(17)、

善是了因、……善爲得佛之本(18)、

○了因者有二義、一者以了因之能本是斷惑顯果、……

二者了因爲用本是始起、……(19)

○因有四者、三是經有之、境界之有相傳師說、何者尋因義、唯應緣正二種、而今因性乃有四者、緣因義則廣觀智境者、束爲緣因、此之緣因故是緣緣義、故境界因名經文無也、眞是先輩諸師釈緣因、謂諸法體義爲心作境界緣、了非境界、異緣因也、

○若因無二則招果不成、故緣正二種明其必用、若果無二則智斷不圓、便非超果表、無足可慕、故明三菩提顯智周滿、次捿涅槃滅累都盡、

○故因果各二、以明理勝可得、故開佛之性、略有四、謂因與果各有其二、因者二者、一正因、二緣因、果二者一智二斷也、

○此是智藏法師自手書佛性義作此說也、(20)

まず、正因については、心を正因となし、心卽覺知として、無差至當のものとされている。これは、さきにみた、智藏法師の一般的佛性義、五種佛性における正因佛性義と同類のものであり、「心識望於種智是因、……宣立受正名、」或は「因中神明得佛之本故宜立爲正因、」又は、「心是正因、……心名正因者心爲得佛之本、」等とともに、智藏法師の正因佛性義として重要なものである。そして、さきの異釋で破せられた如き、妄としての心を言うのでないことは明らかである。

緣因については、基本的な意味での緣因と、了因と內容的に結びつけられているような形で說かれている緣因とがある。後者は、佛性說整理の上から大切である。

まず、基本的な性質での緣因については、「善及衆義助發正因傍相緣由、」とあるように、正因を助發するものという一般的な說明がなされている。

ところが、一方では「萬善但是相緣由而已、」「必藉萬善方現故須立善爲了因、」「善智了因、……善爲得佛之本、」等とも言われているのである。つまり、緣因＝助發正因＝善という一般的形に對して、ここでは、善＝了因という說相がとられておるわけである。さきに述べたように智藏法師の五種佛性義では、緣因は、萬行、萬善脩行であり、了因は、顯了、照了のもの、性不改のものとされて別立されていた。それに對して、ここでは、緣因と了因とが善を媒介として內的に關連せしめられるのである。緣因＝善＝了因という形がとられているわけである。これは、了因の意味の違いを示すものと言ってよいであろう。これは、共有四名の、因因＝觀智心＝了因體の系列の上にあるものであり、三因兩果の佛性義が形成されて行く過程での、了因の內容のおさえ方という點から注目されなければならないことである。

なお、了因は二義ありとして、「一者以了因之能本是斷惑顯果、……二者了因爲用本是始起、……」を說いており、これは、了因を、體と用、果と始というような形でも考えたのではないかと思われるが、詳しいことはわからない。

最後に境界因については、まず、その源由が尋ねられ、正・緣・了の三因はそれぞれ經文にもあるけれども、境界因はなく、相傳師說である旨がことわられている。最初この名を使いはじめたのはどの法師なのか、留意しなければならない。次いで、先輩諸師がどのような理由で境界の名を立てるかが述べられている。卽ち、佛性は、正・緣の二種で十分なのだが、その緣因を更に分別すると、能の觀智と、所の境とに分けることができ、境界因とは、その緣因の中の更に緣という意味で、緣緣の義であり、境は觀智の所であるから、所である境界

は、觀智たる了因によりて立つということができると說かれている。

さて、ここで、正・緣・了に對して、境界因がつけ加えられ、了・境界の二因が緣因を分ったものとされていることは、この智藏法師の佛性義が、未整理の姿を殘しているとはいえ、三因兩果の佛性義へ直結していることを語るものであろう。

以上、正・緣・了・境界の各有四名の四因であるが、この中、緣・了の二因の關係は微妙である。卽ち、兩因は、別でもあり、同でもあるという形で說かれており、何れかと言えば、同の方が强くみられるということである。四因というよりも、三因という方がよいのではないかとさえ考えられる。

次いで四果、—菩提・涅槃・第一義空・智慧—を說くのであるが、これも、三菩提・涅槃、つまり、共有四名の果・果果を說くのみであって、第一義空、智慧については觸れていないようである。

開善智藏法師の佛性義は、以上の如く一般的佛性義と、五種性義と、共有四名・各有四名の佛性義である。

この中、一般的佛性義と、正因・果・果果については前後一であるが、緣因・了因・境界因については未整理の感がある。卽ち、五種佛性については、緣因の中に境界因を說き、了因は緣因とは別立されており、各有四名の四因においては、緣因と了因とが同の形で說かれ、境界因が、一應別のものとされている。更に、了因、境界因は、緣因の能所とされておるので、緣因と了因との關係、緣因と了因・境界因との關係、了因と境界因との關係等非常に微妙になってくる。

(五)

智藏法師の佛性義は右のようであるが、更にそれをはっきりさせる爲に、喜祥大師の佛性義を簡單にみておきたい。これについては、小川弘貫博士が、「シナ如來藏思想の研究」(「印度學佛教學研究」一五卷一號)に述べておられ、重複するところもあるが、必要な範圍でみておこう。

まず、正因佛性については、異釋の所で、すでにみたように、

非眞非俗中道爲正因佛性也、

と言われ、中道たる旨が明確に示されていた。その外嘉祥大師の正因佛性義について小川博士は「要之、上來、眞俗、空不空、智不智、常斷、因果、二不二、本有始有、內外、有無の二の非二の中道を以て正因佛性を解し、之を以て正因佛性義を釋するのである。尙之を擴げて云うならば、四句を離れ百非を絕して皆非の中道を以て正因佛性の義を解し之を釋するのである。」とまとめておられる。

そこで、ふりかえって、智藏法師の假實、衆生心識を正因佛性となす說を想起する時、そこにある兩法師の佛性把握の違いが自らうき出してくるのである。それについてはさきに述べた。

五種佛性について『大乘玄論』では次のように說かれている。

非因而因故有二因謂境了二因、非果而果故有二果、謂菩提與涅槃、今此二因二果並非正因、由非因非果正因、故有此因果故此二因二果並皆是傍(21)、正因佛非因非果、非因而因故有二因、謂境界因與了因、非果而果故有二果、謂菩提與涅槃也、

境界因、卽是十二因緣能生觀智、以是觀智境界故名境界因、以能生觀智之前緣故亦名緣因也、
了因、觀智能了出佛果故名了因、旣了出佛果之緣因故有時呼了因以爲因也、
菩提者此言正遍知道、是從智爲名、涅槃者此言寂滅是則從斷爲目也、(22)

ここでは根本的な正因佛性は、非因非果とされ、境・了の二因、菩提・涅槃の二果はその非因非果の上に捉えられている。卽ち、境・了二因は、非因非果の非因の上の二因とされ、菩提・涅槃の二果は、非因非果の非果の上の二果として据えられているのである。そして、境界因は、十二因緣であり、能生觀智の前緣という意味で緣因とも名けられ、了因は、觀智であって、了出佛果の緣という意味で、やはり緣因とされる旨が述べられている。これを逆に言えば、緣因を二に開いて、境・了としたということである。「開佛性只應二性也、一正二緣」とも言われるように、佛性の最も基本的な內容は正・緣の二因である。そこで、境・了二因を、緣因にまとめるということは、基本的な形である正・緣二因の中に、境・了二因の內容を整理して組み込んだものとも言うことができるように思われる。智藏法師では、まだ內容の整理が不充分であった、緣・境・了三因の內的な相互の關係が、すっきりとまとめられて體系化されたものと言ってよいであろう。

しかして、五種佛性というその名は同じであっても、智藏法師と嘉祥大師では、內容が異っており、むしろ、智藏法師においては、各有四名の四因という形で說かれている佛性說の內容の方が、三因兩果の佛性義に強く繫っているように考えられるのである。

註

(1) 大正藏、四五卷・三五頁・中
(2) 續藏、一輯・七四套、一册・四六丁右
(3) 大正藏、四五卷・四五頁・下
(4) 大正藏、四五卷・三五頁・下—三六頁・上
(5) 大正藏、四五卷・三六頁・上
(6) 大正藏、四五卷・三六頁上—中
(7) 大正藏、四五卷・三六頁・中
(8) 大正藏、四五卷・三六頁・下
(9) 續藏、一輯・七四套・一册・五二丁右
(10) 續藏、一輯・七四套・一册・四六丁右
(11) 續藏、一輯・七四套・一册・五一丁右
(12) 續藏、一輯・七四套・一册・五一丁左
(13) 續藏、一輯・七四套・一册・五一丁右—左
(14) 續藏、一輯・七四套・一册・五一丁左
(15) 續藏、一輯・七四套・一册・五一丁左
(16) 續藏、一輯・七四套・一册・五一丁左
(17) 續藏、一輯・七四套・一册・五一丁左
(18) 續藏、一輯・七四套・一册・五二丁右
(19) 續藏、一輯・七四套・一册・五二丁右
(20) 續藏、一輯・七四套・一册・五一丁左
(21) 大正藏、四五卷・三八頁・上
(22) 大正藏、四五卷・三八頁・下

「後記」
本論は、元來、師小川弘貫博士が、多年、繼續發表しておられる「シナ如來藏思想の研究」の一部をなす性質のものである。これをまとめるに當って、先生から全面的な御指導を賜わった。深き法愛に合掌を捧ぐ。
なお、平井俊榮先生にも御教示を仰いだ。ここに、感謝の意を表する。